



0. 報告日：2012年 4月 5日（木）	
1. 訪韓期間と場所：2012年3月25日（日）～3月31日（日）、韓国：ソウル・江陵等	
資料作成者	<p>(所属、学年) 大分大学大学院工学研究科 建設工学専攻博士前期課程1年</p> <p>(氏名) 山口 拓也</p>
2. 交流・調査の着眼点	
<p>テーマは「親緑空間の整備状況把握と韓国における建築物と緑との関係性」である。</p> <p>着眼点としては、主に韓国と日本との親緑空間の違いや、建築物における緑の位置付けなどである。</p>	
3. 調査記録	
<p>■2012/3/25 ソウル 清溪川</p> <p>清溪川は、以前清溪高架道路であった部分を撤去し、復元した全長約5.8kmの人口河川である。図1からもわかるように、人工的に作られた河川であるため、川縁はコンクリートで水の流れも速い。しかし、親水空間としては、水に近く、触れ合うことが容易であるため、良好であるといえる。緑をみると、清溪川の両サイドにある道路の街路樹はあるものの、川周辺には緑空間がなかった。人工的に河川をつくり、市街地に自然を取り入れたにも関わらず、緑と水という切り離せない2つがうまく機能していないのは残念だったが、日本にはこの川のように大規模な親水空間というものがいないため、親緑空間を踏まえた上で見習うべきではないかと思う。</p>	
	
<p style="text-align: center;">図1. 清溪川</p>	
<p>■2012/3/25 ソウル 北村</p> <p>北村は韓国の昔ながらの町並みが残る地域である。図2のように、住居の外壁には独特な模様があり、建物自体は煉瓦造や木造が多くみられた。また、外壁や塀はレンガや石が多く使われており、通路は現在と比べると狭い。日本でいう京都の町並みに似ている部分があった。屋根は瓦を用いており、日本の古い民家と通じるものがあった。しかし、全体を通して色合いが日本に比べると明るめな色が多く、色自体も各家で異なり、町並みとしては均整がとれていないように思えた。庭や道の植栽はあまり手入れがされておらず、種類としては竹や松が多く使用されていた。このことから、日本とは違い、植栽などで家を飾るなどの概念が希薄であると推測される。また、日本のように庭の木々をみて楽しむという考えも少ないように思えた。</p>	
	
<p style="text-align: center;">図2. 北村</p>	

■2012/3/25 ソウル 景福宮

景福宮は、朝鮮王朝を代表する宮殿である。その多くは復元されたものであるが、色使いや構造は今とは異なることがみてわかる。図 3 からわかるように、色は明るい黄緑が多く使われており、日本の伝統的建物と比べると奇抜なものになっている。また、屋根の部分の造形は豪華であるが、日本の造形に比べると色も含めて奇抜な印象を受けた。



図 3. 勤政殿

また、図 4 からわかるように、景福宮は北岳山、仁王山、駱山、南山と多くの山に囲まれている。周辺にも多くの樹木があり、自然に囲まれているといえる。これは、景福宮が風水において好地に建てられていることが理由として考えられる。さらに、光門、勤政殿、思政殿、康寧殿は南北を軸に直線上に並んでおり、これらの主な建物に付属した建物は各領域の中で左右対称となるように配置されているなどからも、風水を考えて建てられていることがわかる。これは日本でいう平安京や平城京と考えが似ているように思える。



図 4. 北村より見た京福宮周辺

■2012/3/25 ソウル 南山タワー(ソウルタワー)

南山タワーはソウルの南山公園内にある高さ 236.7m の塔である。図 5 をみてわかるように、南山タワーのフォルムは日本に存在する塔と比べて、展望台部分が塔の太さに対してかなり太く、あまり美しいフォルムではない。

また、南山タワーよりソウルをみた図 6 をみると、ソウルは日本に比べ高層ビルが多くあることがわかる。これは、日本に比べ地震が少ないことが大きな理由といえる。周辺の山による緑は多く分布しているようにみえるが、計画的緑地は少ないようにみえる。日本同様に、都市化による緑



図 5. 南山タワー

の分断が目につく。しかし、日本に比べると分断されている緑の規模がかなり大きいことがわかる。



図 6. 南山タワーよりみたソウル

■2012/3/26 ソウル再開発地区

ソウルの再開発地区は図7からもわかるように、高層ビルが多く形状も日本に比べると独特なものが多い。日本との法律の問題もあるが、やはり地震の発生数に起因するところが大きいと思われる。また、色も少し奇抜なものも多く、形共に周囲の建物との統一感があまりない。季節の問題もあるが、幹線道路の近くにしては街路樹が少ないように思えた。しかし、図8に示すように、日本に比べると歩道空間に2本ずつ樹木を配置するなど、整備がされているところは街路樹環境が良いといえる。もう1つ日本と比べて良い点としては、バス停の整備や本数の豊富さである。すべてのバス停には屋根があり、バスを1本見送っても次のバスが後ろに控えている状況も見られた。しかし、これは同時に交通渋滞の要因にもなっているのは事実である。日本もそうだが、公共交通と一般交通とのセパレートが必要に思えた。



図 7. ソウル再開発地区

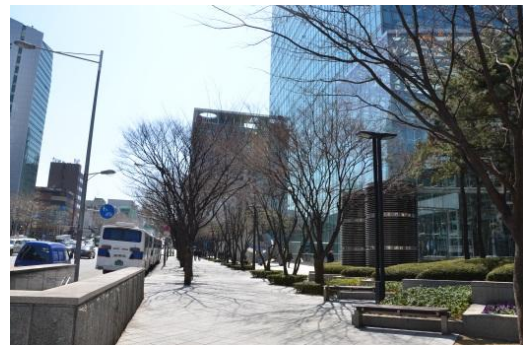


図 8. Posco 前歩道

また、韓国で大手の企業など資金が豊富なビルの前には親緑空間を設けているが、そうでないところは全くないなど、整備されているところとそうでないところの差が大きいのが現状であった。さらに、I'parkをはじめ、屋上緑化をしている建物もいくつか見られた。しかし、ただ植えているだけという印象を受けるほど、樹種や配置をあまり考えていないように見え、緑を目で見て楽しむという観点では良いとはいえない。

■2012/3/26 ソウル 良才川，タワーパレス

良才川は緑の整備がきちんとされており，親水，親緑空間ともに良好な空間だといえる。また，ウォーキングロードの整備もされており，そこに植えられている樹木により，季節も感じることができる。さらに，良才川周辺の道路の街路樹もきちんと整備されていた(図9参照)。

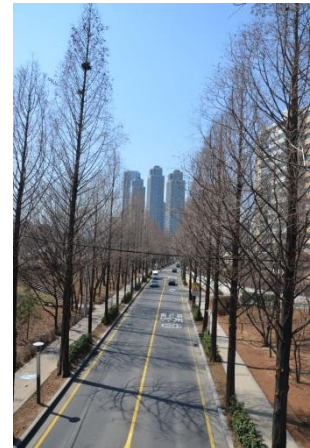


図9. 良才川周辺道路

タワーパレスとは，サムスン物産によって建設された高層マンション群であり，A棟からG棟までの7つの棟がある。その中でもG棟は73階建ての高さ264mもの高層マンションである。良才川からタワーパレスをみると，遠近感があるにもかかわらず周囲の団地と比べてもその大きさがわかる(図10参照)。マンション自体の形状も独特であり，マンションというよりはホテルのように思えた。日本でいうところの六本木ヒルズのような高級マンションではあるが，六本木ヒルズのようにビル群の中に建設されているのではなく，自然や民家の中にこれだけの規模のものがあるのはやはり景観的にも良いとはいえない。



図10. 良才川より見たタワーパレス

■2012/3/27 江陵 江陵大学での研究交流

江陵大学との研究交流を行い，大分大学からは7名の学生による卒業研究の発表を，江陵大学からは大学院生2名による卒業作品と研究の発表を行った。江陵大学は大分大学と違い，デザイン重視な印象を受けた。CADにしても我々よりも技術は高く，案としてもよく練れているものであった。また，研究内容は日本語で発表していただいたおかげもあるが，我々でも理解できる内容であり，同じ建築を学ぶ者であれば国籍は関係がないことを改めて実感させられた。

■2012/3/27 江陵 鏡浦臺

鏡浦臺は地方有形文化財に指定されている八作屋根の大きな東屋である。外観はソウルの景福宮ほどではないが，やはり明るい黄緑色が多く使われており，模様なども日本に比べると奇抜なものである。内観は，図11からもわかるように，外観よりも模様などが多く奇抜である。また，梁の通し方が日本と異なり独特の方法を用いているように思えた。日本の様に，身分の高い者が座



図11. 鏡浦臺内観

るところは周りよりも段が高くなっていた。しかし、日本に比べると段が高く腰掛けるほどの段差があった。さらに、図 12 からわかるように、周囲を自然に囲まれており外からも建物を楽しめるが、建物内部より景色を楽しむことができる。また、外観の黄緑色と周囲の樹木の緑が合っており、建物だけではない良い雰囲気を出していた。やはり、建築物の周囲の緑は重要であることがわかる。



図 12. 鏡浦臺外観

■2012/3/27 江陵 烏竹軒

烏竹軒は申師任堂が暮らしたところで、李珣の生家であり、韓国の住宅建築の中でも最も古い木造建物の1つである。図 13 からわかるように、民家ということもあるが、今までの韓国の建物と違い、色合いや造形は質素である。しかし、門などはやはり明るい黄緑色が使われており、柱や梁の造形も奇抜である。また、オンドルを用いているため、日本の昔の民家に比べると床が高い。床が高いせいもあるが、屋根と天井高のバランスが日本とは異なり、天井高が低い印象をうけた。図 14 をみると、建物の由来にもなったように黒竹が多く生えており、また、植栽などの手入れや配置もきちんとされているため、自然との調和を感じ取れた。



図 13. 烏竹軒



図 14. 烏竹軒周辺

■2012/3/27 江陵 船橋荘

船橋荘は、李乃蕃により建てられた上流階級の住宅であり、重要民族資料に指定されている。特徴的なものは、まず平面構成である。建物自体で男女を分けており、主人の建物、大人の女性と子供の建物、召使いの建物など身分によっても分けられている。また、屋根は瓦が使われており、この家が上流階級の家であったことがすぐわかる(図 15 参照)。外観としては日本の伝統的家屋と似ているが、やはりオンドルがあるために床が高く、部屋に入るためには苦勞する。また、バランスも日本に比べると屋根が大きい印象を受けた。

これは独特の屋根形状が主な要因のように思える。外壁の白と柱や屋根の木が良いコントラストを生んでおり、さらに、まわりの木々の緑がよく映えているため、景観としても非常に良い印象を受けた。



図 15. 船橋荘

■2012/3/28 太白 太白山

太白山は標高 1567m の山であり、神の息子が降りてきた天を祭る山とされており、神聖な山とされている。頂上には 3 つの天祭壇がある。また、自然に恵まれており、季節によって違う表情を楽しめる。図 16 からわかるように、標高の高い山々が連なり壮大な光景が広がっており、ここが神聖な場所とされている意味がわかる。



図 16. 太白山

■2012/3/28 安東 三亀亭

三亀亭は素山里に住む老母のために息子達が建てた亭であり、慶尚北道有形文化財である。図 17 からわかるように、外観は今までの建物の中で色や造形をみても一番質素であり、日本の伝統的建物と似ている。しかし、図 18 のように、内部の梁の通し方や屋根の構造は日本のものとは異なっていた。また、まわりには樹木が多くあり、建物の後ろには風水樹である大きな樹木があった。韓国の伝統的建物は自然と調和し、また、内部から風景を楽しむ傾向があるように思える。



図 17. 三亀亭外観



図 18. 三亀亭内観

■2012/3/29 安東 河回マウル

河回マウルは韓国の代表的な同姓村で、瓦屋と藁葺屋が混在している(図 19 参照)。また、船橋荘と同様に、男性と女性と召使いで建物が分けられていた。藁葺屋は建物による区分がされていたかはわからなかったが、瓦屋とは異なり、外壁も土壁のようで色も白色ではなく、肌色に近い色であった。今までの韓国の建物の中で大きく異なっていた点としては、庭がきちんと整備されており、そこには遺灰をまく場所もあった。しかし、あまり建物内部から緑が見えない状況であったため、日本の庭とは概念が違うように思えた。

また、S字型の洛東河により村が囲まれているためか、村全体の形状や色の均整がとれており、建物としてだけではなく1つの景観として楽しめる。さらに、三神堂とよばれる樹齢600年を越える樺の木が村の1番高い中心部にあり、やはり風水を考えていることがうかがえる。



図 18. 河回マウル

■2012/3/29 安東 屏山書院

屏山書院は、儒学者である柳成龍が教を諭した場所で、今でいう学校だった場所である。今までの建物の中で、1番建物内部からの風景を楽しむことを意識して建てられたように思えた。建物自体が木造ということもあり、自然との調和が違和感なく受け入れられる。また、外壁がない立教堂(イッキョダン)や晩対楼(マンデル)から外の風景を見ると、柱によってそこは1つの風景画のように風景が切りとられたように感じさせられる(図 19 参照)。さらに立教堂から晩対楼までの直線に対して東棟と西棟が対称にあり、また、背後の山もあり自然を感じられる上に、景観としても良いものになっている(図 20 参照)。



図 19. 立教堂からの景色



図 20. 立教堂から屏山書院全体を見る

■2012/3/29 安東 俗離山法住寺

法住寺は、553年に創建されたとされ、壬辰倭乱の時に全焼したが1624年に立て直され、現在の形になっている。境内には国宝や数多くの宝物がある。中でも木造の五重塔である捌相殿は、韓国に残る木造の塔の中で最大である。しかし、図21からもわかるように、フォルムとしては、日本の五重塔よりも下層部が大きく、また内部は梁の通し方が乱雑であり、日本のそれとは大きく違っていた。外観をみるとやはり色は少し奇抜ではあるが、今までの建物ほど明るい色ではなかった。また、まわりを山に囲まれており、自然を感じることができるが、屏山書院ほど自然が身近に感じられなかった。これは物理的距離もそうだが、色合いや建物の素材感も要因ではないかと考えられる。



図21. 俗離山法住寺

4. 全体の感想と今後の抱負

今回の韓国調査と交流を終えて、1番に感じたのがやはり交流の部分での自分の英語力の拙さである。同じ建築を学ぶ者であり、共通の話題があるにも関わらず自分の伝えたい事が正確に伝えられないもどかしさを幾度も感じた。また、同時に国籍や言語も違うが、共通するものがあれば通じ合えることも学べた。

建築分野で見ると、韓国は日本に比べると非常に形や色が個性的である印象を受けた。現代建築であるソウルの高層ビルにしても、形が独特で色の使い方が奇抜であった。また、伝統的建物にしても梁の造形や屋根の装飾は日本のそれよりも派手であった。国によって同じ木造の建物でもここまで違うものかと驚かされた。しかし、日本よりも、自然との調和を意識して建てられていることがわかった。また、建物を外から見ただけではなく、どの様に内部から外の景色を見せるかということを考えて建てられていると思った。

最後に、韓国の親緑空間についてだが、日本に比べるとかなり劣っていると言わざるを得ない。なぜならば、親緑空間自体も少なかったが、それが存在してもきちんと整備されておらず、配置や樹種を考えずにただ植えただけのものが多かったからだ。しかし、ソウルなどの屋上緑化や一部の親緑空間をみると、緑の空間を増やそうという取り組みは感じられた。今後は日本も含め、どの様に緑を見せれば、人に癒しの空間として認識されるかを考えながら計画することが大事であると感じた。